

全日本テニス選手権 会場を中心とした歴史的視点

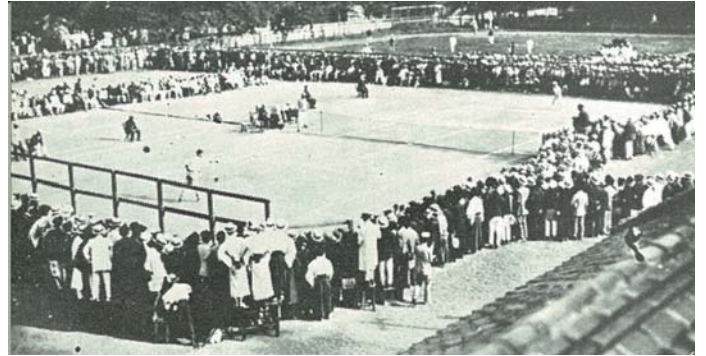
全日本選手権は、1984年の第59回大会で会場が有明テニスの森公園に固定されるまで、基本的に東西で交互に開かれてきた。会場と選手の歩みに彩られた歴史は、日本のテニス史そのものでもある。

全日本選手権は1922年（大正11年）に始まる。第1回は9月9日から15日まで東京・本郷の帝大（現・東大）コートに男子選手だけシングルス63人、ダブルス26組が参加して行われた。初回のシングルス優勝者、福田雅之助の「全日本男子選手権大会十年の回顧」（日本庭球協会十年史）によれば、「（決勝は）コートの周囲、山下から山上まで黒山のように全く立錐の余地がないほどファンが集まった」そうだ。硬式は用具調達の難しさから国内には軟式庭球の素地があったとはいえ、新興といえる硬式庭球に対する興味と期待の大きさがうかがわれる。

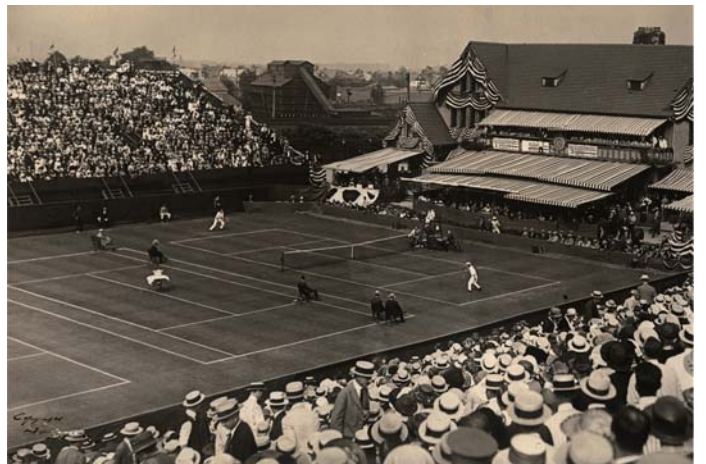
それもある意味当然だった。前年の21年、デ杯初参加の日本が海外在住の熊谷一彌、清水善造を擁して各国を撃破。チャレンジラウンド（現在のワールドグループ決勝）まで進み、デ杯保持国の米国と世界一を争う快挙（準優勝）を成し遂げたからである。

全日本選手権創設に至る前史には、このデ杯快進撃が大きく寄与していた。当時、日本に硬式テニスを統括する全国組織はなかった。日本庭球協会（現・日本テニス協会）の初代の会長になる朝吹常吉が米国に立ち寄った20年10月、熊谷の米国での活躍（全米3位にランク）をみた米国協会からデ杯参加を要請され、日本に統括組織のないまま、21年3月までに申し込むことを約束した。熊谷以外に、20年のウィンブルドンで前年優勝者への挑戦者決定戦「オールカマーズ」の決勝まで勝ち進んだ清水が現れていた。問題は組織と経費。しかし、当時の米国本土での「黄禍論」（日本・アジア排斥運動）沈静化へ向けテニスによる国際親善が有効と考える朝吹氏や経済界が尽力した。清水は勤務先の三井物産幹部が社内の異論を退け、勤務地のインドからデ杯開催地米国までの旅費、滞在費を負担。米国勤務の熊谷は所属先の現在の三菱銀行が負担した。つまり、「有名無実の協会はさしあたり資金の心配はなかった」（協会十年史）。

そのうえデ杯戦で決勝まで進んだことは実利ももたらした。開催国・米国協会から分与金42080円が送られてきた。大正年間の4万円は米価換算で現在の約1億4600万円にも相当する。22年8月31日の会計報告では、この米国からの大金が前年度収入全体の9割以上を占めている。資金のゆとりができ、22年3月11日、日本協会が発足。全国組織が生まれ、この年の秋に全日本選手権が初開催される。熊谷・清水のデ杯奮戦のおかげともいえるだろう。そういえば、日本のデ杯戦を応援したニューヨークの日本クラブが銀製のニューヨーク・カップを作り、日本協会へ寄贈した。



▲第1回全日本庭球選手権大会は東京帝大御殿山下コートで行われた。男子単決勝、手前・太田芳郎選手、先方・福田雅之助選手



▲第1回全日本が行われる前年、1921年熊谷一彌と清水善造がデ杯に初参加でチャレンジラウンドに進んだことが硬式庭球への興味を誘った
写真所載：ITHF



◀デ杯決勝まで進んだことで米国協会から分与金が送られ、その資金を基に日本協会が設立された。当時テニスによる国際親善のために奔走した朝吹常吉が第一代会長に就任した



▶戦前はニューヨーク日本クラブから寄贈されたニューヨーク・カップが男子シングルの優勝杯として用いられた。ビールは18本分注ぐことができる大きさであった

これが全日本選手権男子シングルの優勝杯として戦前用いられた(第2次大戦中の空襲で焼失)。

福田は前述「全日本の回顧」で優勝後、所属クラブで祝杯を挙げるためにニューヨーク・カップにビールを注いだそうだ。「恐ろしい勢いでビールは消えていった。ついに8本で止めてしまった。これ以上入れば両手で持てないし重みで飲むことができない。後で知ったが、ニューヨーク・カップはビールを18本、サイダーなら24本を飲む太い腹をしている」と喜びの反応を記している。

第2回は翌23年、大阪の豊中、築港コートで行われた。大会規則は27年(昭和2年)に制定されるが、開催地は草創期から東京と大阪の交互で、が習わしとなった。

27年の第6回大会は大阪で甲子園コートが初めて用いられ、後のウィンブルドン、全仏のベスト4、佐藤次郎がデビューした。4人しかシードされない強豪の一角を初戦で崩し「大センセーションを起こした」という。フォアの強打が早くも威力を發揮した。佐藤次郎は3年後、東京の上井草、早大コートで開かれた第9回で初優勝を果たし、世界へ飛躍してゆく。

当時、問題はボールだった。国産はなく、英国製スラセンジャーが公認球として使用されるのは昭和に入ってから。それ以前は海外の「ライトボール」で、福田は十年の回顧に「そのボールが使われていた頃はベースラインの打ち合いで、もっぱら相手の自滅を待つプレーぶりであった」と記した。1球2円(当時の銭湯は2銭程度)もする高価なボールは徐々に広まってきた大学でも潤沢に使えず、フェルトがすり切れて内部のゴムが見えるまで用いたという。福田は、ボールの変更が日本テニスの質の変化に影響を及ぼしたと書いている。

ちなみに女子は24年に東京ローンクラブで初めて行われ、シングルスは黒井梯子が制している。ただ参加は20人足らず。女性の普及は一部でしかなかったことがうかがえる。また男女同一開催まで10年以上を要した。

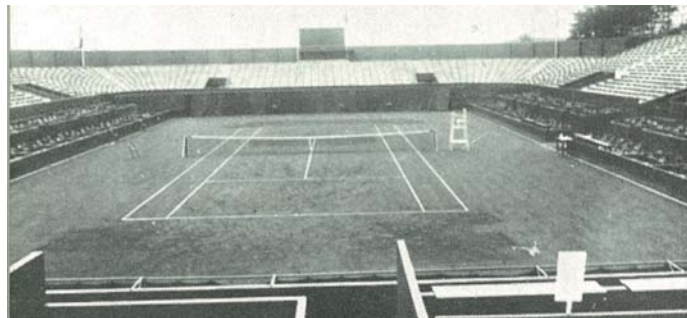
37年、センターコートが完成した甲子園国際庭球倶楽部での第16回大会でドイツのデ杯選手、フォン・クラムが外国人として初の男子シングルス優勝を成し遂げた。この大会から1会場ですべての実施がかなう。

翌第17回大会は東京の田園クラブで初開催。同クラブには2年前に、読売新聞が招待したチルデンら世界のプロのエキジビション会場として田園コロシウムが作られていた。こここそ、戦後も長い間、デ杯や全日本の会場として使われた名クレートコートである。この年の覇者は山岸二郎で、4度目のタイトル獲得だった。

41年12月に日本は太平洋戦争に突入する。その年は切迫する国際情勢下、各競技の全日本選手権は一切中止となった。翌42年は明治神宮錬成大会を兼ねて第20回全日本が田園クラブで開かれ、男子シングルスは鷺見保、女子は山川道子が初優勝した。その後、大会は戦争の激化に伴い開催不能となっていった。

終戦後3カ月もたたない45年11月に日本協会が再興、全日本は46年10月に田園クラブでの第21回で復活し、男子シングルスは藤倉五郎、女子は加茂幸子がそれぞれ初制覇した。加茂はここから6連覇し、54年のウィンブルドンで日本女子初出場(3回戦進出)へとつなげた。

48年の第23回はパレスコートで開かれた。皇居の大手門を入った場所に設けられ、簡易スタンドもあったとい



▲元甲子園国際庭球倶楽部センターコート全景(1937年)



◀白砂青松の地に立つスペイン風の甲子園国際庭球倶楽部ハウス。最盛期にはコート数が100面を超えた

▶佐藤次郎は早大コートで開かれた第9回大会で初優勝を果たした



▲女子の第1回大会は東京ローンクラブで行われ、黒井梯子が制した

▶航空写真による三年町時代の東京ローンテニス倶楽部コート。左上に国会議事堂、右下に倶楽部のコートが見える(『大東京写真案内』(1933年刊)所収)



◀甲子園コートで行われた第16回大会では、ドイツのフォン・クラムが慶應大学の山岸二郎を7-9、6-4、6-4、6-4で破り、外国人として初めて男子シングルス優勝者となった

▼加茂幸子は21回大会から6連覇を飾り、ウィンブルドン出場へとつなげた



▼戦後初の大会が行われた田園クラブ





▲皇居内のパレスコートでは計4回全日本が行われている

う。戦後の皇居開放による会場だった。パレスコートはこの後50年、53年、57年と日本一の舞台となり、それぞれ隈丸次郎、加茂公成、宮城淳と戦後の名手がチャンピオンに輝いている。同時代、女子は加茂と宮城黎子の「2強時代」が続いた。実にこの2人が46年から63年まで女王の座を占め続けた。

57年を最後にパレスコートは使われなくなり、田園クラブと韮公園コートが東京、大阪の主会場になる。この時代、男子は石黒修、渡辺康二、神和住純、坂井利郎らそうそうたる選手が日本一に輝き、女子は沢松和子の時代が続いた。

76年、四半世紀ぶりに名古屋開催となり、名城コートで3連覇を目指した坂井が2回戦で敗れ、現役引退を表明した。翌年、韮公園での全日本は20歳、米国留学帰りの福井烈が当時の最年少優勝を飾った。韮の球足の遅いアンツカーが、彼の堅固なストロークを支えた。世界の趨勢に遅れながらもオープン化された79年の第54回も韮が会場。福井がプロの九鬼潤にマッチポイントからの逆転に成功、3連覇を達成した。結局福井は7度優勝の全日本男子最多記録を成し遂げる。全日本は世代交代の場だった。

そして84年から会場は東京の臨海部に新設された有明テニスの森公園に移った。ハードコートに舞台は変わり、89年には高校生の谷沢英彦が福井を圧倒し、17歳9カ月の最年少Vを記した。この前年、88年には収容人員1万人の有明コロシウムが完成、日本テニスのメインコートとなった。その門出で女子は沢松奈生子が初優勝。「日本のウィンブルドン」を目指した関係者に、ウィンブルドン優勝者の姪の優勝というこの上ないプレゼントとなった。

その一方で名コートキーパーの平林真氏らが丹精込めて整備し、世界トップクラスのクレーコートと評価された田園コロシウムは東急電鉄の工事の関係で89年を最後に表舞台から消えた。

有明コロシウムを舞台に女子は伊達公子、杉山愛らウィンブルドンで活躍する選手が巣立っていったが、近年は男女とも全日本は世界への登竜門的な認識が強い。男子は松岡修造、錦織圭が全日本に出場していない。ツアー転戦の日程的な問題だろうが、「負けられない」というヒリつくような圧迫感の中の試合はいい経験になるはずだが…。

福田雅之助は「全日本十年の回顧」に男子は21人の選手が単複チャンピオンに輝いていると記し「しかし**日本の庭球界をつくった人はただの21人ではない。21人の選手を生むのに土台となった数々の人々がある。それらの人々があってこそチャンピオンが生まれたのだ。これらの尊い無名のプレーヤーの存在を忘れてはならない**」と記した。この指摘は現在も生きている。 文：小沢 剛（共同通信社）

▶パレスコートでは戦後の名手と言われた隈丸次郎（左写真）加茂公成、宮城淳（右写真）が優勝している



◀17年の長きに亘り「2強時代」を築いた左から宮城黎子1人置いて加茂幸子

▼大阪では韮公園コートが主会場となった。左から、宮城淳（シングルスとダブルス）、柴田善久（ダブルス）、宮城黎子（シングルスとダブルス）、福井昭子（ダブルスと混合）、倉光安幸（壮年シングルス）、堀越春雄（壮年ダブルス）、鶴原謙造（壮年ダブルス）、鈴木通弘（混合）



▲東京では田園クラブが主会場となった



◀第59回大会からは有明での単独開催に



▲1992年大会で2連覇を達成した伊達公子。有明コロシウムで優勝杯を掲げる
写真提供：ベースボールマガジン社



▲「田コロ」の愛称で親しまれた田園コロシウムは、やがて有明テニスの森に役目を引き継ぎ、昭和が平成に替わった年、1989年の12月に姿を消した



◀日本一のコートを作る。平林氏の情熱が「コートと話ができる」とまで言わしめた。沢松、小浦選手に囲まれた平林氏（全日本選手権最終日、田園コートにて）